
あかいと

soro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかいいと

【Nコード】

N4589BA

【作者名】

s o r o

【あらすじ】

テスト投稿です。今度拍手にいれるためのSS。

あかいいと、見えたらどうしますか。

ものごころついた頃からそれはあった

それは、誰にでもあったし、それがくっついてるのがあたり前なんだと思つてたら、あっさり小学校のとき、みんなにそれは見えてないんだと発覚した。

それ以来、私だけが見えるそのことは、誰にも何にも言っていないけれど、ふといつも首をかしげてしまう。

この赤い糸なあんだ？

2

1 .

赤い糸、赤いと、あかいと…ってなんだろうなあ。

よく在るよく聞く、あかいと。

うん、普通はね、普通はさ、運命の人との目印だっというんだけど、けれど私が見える赤い糸はただのわちゃくちゃ。道端で、もつぼれあつてるただ邪魔なだけの代物。

今朝も高校へ行く途中で二、三回足を引っ掛けて転んでしまっただけのはた迷惑なしろもの。

薬指を空にかざしてみる、あたしの指にもそれは確かにある。

手繰ってみようかしら？

なんども試してみようと思ってみたことはあるけれど、実際子供のときはよく自分のそれをひっぱって遊んでたけれど、以前に足で引っ掛けてちぎれてしまった赤い糸のカップルが、目の前で大喧嘩したのを見てしまって以来、ノータッチ。伝説は本当だったみたい。いまでは、けつまずいて切れないように慎重に慎重にそうっと歩いている。

だって、私がちょっとけつまずいただけで、あつというまにその人の運命の相手って人との縁が切れちゃう。そんなのってあんまりなような気がするの。

けれど、小学校のとき初めて赤い糸の話をした友達がこう言ったことがあった。

「『しめい』だよ、きつと」

覚えてたの言葉をありったけ自慢げな顔でそう言った。

「しめい？それってなに？」

「じぶんがやらなきゃいけないこと、じぶんだけのやくわりだよ」

「ふうん」

なんだかすごい気がした、すごい気がして、なんだかそのことが特

別に思えて、気が大きくなって、あたしはにっこりと友達に笑った。

「うん、これってあたしの『しめい』なんだ」

2 .

「そう言っつもりで言った訳じゃなかったんだけどなー」

ズコーと、勢い大きな音を立ててピクニツクのコーヒーをストローで吸い込む友達。

ブレザーを肩にかけ、ネクタイはけだるそうに緩まり、高校の校舎の屋上の柵にもたれかかって頂垂だれながら、隣のあたしに言う。

「俺はさ、キューピッドよろしくな感じを言っていたわけで、まさかお前に『恋人破壊神』なんて二つ名が付くような行動をとらせることを、そそのかした気はまったくなかったんだよな」

「これがまた意外と世間から需要があるのが悲しいわよねえ」

同じく柵にもたれていたあたしは、空で両手を合わせブチンとなにかをちぎる動作をする。それを横目で見た友達が引きつりながらストローを吸い、ピクニツクをベコリとへこませた。

「ほんとにそんなつもりじゃなかったんだよな」

そう言っつて、あたしの頭にちょこんと飲み終わったピクニックを乗つけた。

「ちよつと」

ごみを乗せられ、不満を露わに隣を根目付ける。

「俺のは？」

「今飲み終わったでしょ、あたしのみまでとる気？」

「そうじゃなくて」

あたしは自分の食糧のピンチを悟り警戒するが、あっさりと首を振る。

「俺の薬指にもついてる？あかいいと」

「……まあ、うん」

まっすぐに見下ろされ、きまわずそうに眼をそらして頷いた。

そして友達の口が開かれる前にあたしはきびすを返して屋上の扉をめぐらした。

「さあ、今日もC組の匿名希望から依頼が来てたんだつたあ」

そらぞらしい棒読みの大きな独り言を口走っていつもの1.5倍速で歩を進めた。

「この件になるとなんかおかしいよなー」

あっちの大きな独り言も丸ごと無視して歩き続けて、つまずいた。

「ほあっ」

つまずいたあたしの腕を、寸でのところで友達は捕まえた。

「糸まみれの道を一人で歩くから、そうなるんだよ。ほら手捕ま
て」

「うん」

よろけたあたしを立て直した友達があたしに手を差し出す。

6

「行くんだろ、C組。助手がお供いたします」

「よろしくお願いします」

なんだか嬉しそうな友達の顔に罪悪感を覚えながら、

子どもみたいに手を引かれて、屋上の扉をくぐるのだった。

ごめんなさいごめんなさい。

初めて自分が意図してその糸を断ち切ったのは友達のそれだった。

その日は嫌な事があって、とつても嫌な事があって、
どうしても友達に聞いてもらいたかったのに、
友達は他の子と仲良くおしゃべりしていて、

自分はただ腹が立った、それだけで、

そんな理由で

友達のあかいいとを切ってしまった。

ごめんなさい、ごめんなさい。

お詫びじゃないけど、

お礼でもないけれど、

こんな嫌な奴にずっと付き合ってくれた友達に、いつか好きな人が
現れたら、その薬指にフヨフヨと漂っているその糸に、相手の子の

糸を固結びして、何があっても切れないように、ぎゅっぎゅっに結んであげるから。

だからずっと友達でいてください。

友達ならあかいいとが切れても、くっついていても、全然関係ないから、

だから、友達でいさせてください。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4589ba/>

あかいいと

2012年1月12日16時51分発行